檜垣先生（以下H）：土井先生との話はいかがでしたか。

想田（以下S）：前回、「個性がないと居場所もないように思えてしまう」という意見が出て、個性を大事にしようと考えてことがよくないのでは、ということが問題になりました。自分に居場所があるということは、自分にかげがえのない価値があるということでしょう。そうした価値を私は個性だと考えているため、個性を大事にしようと考えている点は変わっていません。ですが、他人と比較しない内閉的個性は自分の思い込みであって、かけがえのない価値としての個性ではない、というように、個性とはどういうものかについての考えは、変わったと思います。やさしい関係を志向するような今のメンタリティでは、対話により違いを確認することは不可能ですが、自分ではなく目的を見つめることによってなら、異質な他者と自らを比較するという対立を伴う行為の負担を減らせます。

H：対話は、対立だけでなく共通のものを見出すことまでしますよ。それと、個性とかけがえのなさをどう捉えるかということが、問題になってくるでしょう。想田さんは、個性とかけがえのなさを同一視していたし、今もしているということですね。

S：そうですね。

栗原さん（以下K）：一つ思ったのですが、想田さんの言う状態において、かけがえのなさは他者にも認められていますか。

S：確かに、今までのようなやさしい関係、もちろん今も作ろうとしていますが、そこにおいては、内閉的な個性が志向され、まなざしが内向きになっており、自分が認められることばかりで、かけがえのなさを相手に認めるという発想はないでしょう。ですが、目的ベースの関係なら、相手にかげがえのなさを認めることも可能だと思います。土井先生は目的のための関係ということで、鳥人間コンテストの例を出していました。個別的関係の外に、「遠くまで飛びたい」という目的を共有することで、自分以外のことに目を向けること（他者を発見すること）ができます。

K：ですが、「遠くまで飛びたい」という目的も、結局自分の目的ですよね。そんな自分ベースの関係で、かけがえのなさは見出せますか。

S：自分ベースの関係というのは、関係にしか関心がない状態で、関係のための関係になってしまっているわけですから、確かにかけがえのなさは見出せないでしょう。そうしたスクールカーストのようなものを上げたいという欲求よりも、「遠くまで飛びたい」という欲求のほうが強くあり、自分の内側に向けられていたまなざしが、目的という外を向くことで、相対的に軽くなっている状態を、ここでは考えています。自分が本当に欲している目的を相手と共有しているので、その相手は自分にとって必要な人です。同時に自分も相手に必要とされるわけですから、自尊感情にもつながります。

H：素朴な疑問として、目的のために有効でなくなったら相手との関係を切るのか、とい

うことがあります。

S：確かに、突き詰めればそういう側面も出てくるとは思いますが、目的を共有するのは、あくまでも、対立を受け入れやすくして、相手の異質さを発見するためです。

H：目的のための関係というので、異質さやかけがえのなさを本当に発見できると思っていたら、2年ほどカントを読んで、それじゃあちょっと、という感じですよ。

S：目的を設定することは、仮言的であり相対的であるため、かけがえのなさのような絶対的なものは見出せないはずだ、ということでしょうか。ですが、私のような、つまりやさしい関係を志向するような、今のメンタリティでは、対話のような形で異質な他者と関わることは不可能であるため、自分へのまなざしを相対的に軽くすべく目的を設定するわけです。ですから、私はやはり目的というものを重視したいと思います。それに、対話は、対立だけでなく共通のものを見出すということでしたが、それは、「共通のものを見出すために」という目的だと思えているのですが。

H：どうにも目的を強調しすぎのような気がするんですがね。永延さん、今までの話の中から気になったことはありますか。

永延さん(以下N)：想田さんが目的のための関係というのを強調するのは、自己意識が強く、他者をあまりに異質だと思っており、自分がそう思うのなら相手もそう思っているだろうというように、相手が違うことを考えているという発想がないからだと思いました。ですから、他者の視線を軽くするというより、「自分が見られている」とする自己意識のほうを問題にしたほうがいいのではないのでしょうか。

S：まず、他者を異質には思っていないと思います。やさしい関係において、他者とは、自分との共通点が一切なく、無視や切り捨てをすべき異物、モンスターのことです。もちろん、相手とやさしい関係を作ろうとする以上、相手に何らかの意味で共通のものは認めているでしょうが、それは趣味とかノリとかいったものでしょうね。それを共有できなくなれば、自分もモンスターになってしまうので、自己肯定感のためだけでなく、モンスター扱いされないためにも、空気を必死に読むことになります。そこで、目的を共有することで、相手は異質なだけで人間であるということも、理解しようというわけです。大学入学前の試みもそうした趣旨だと思います。それから、永延さんの指摘の後半が良くわかりませんでした。「自分が見られている」という意識は、どんな関係にでもありますよね？対話なら真理という抽象的な他者に見られているという感覚があるはずです。神や道徳法則のようなものでもいいでしょう。目的による関係によって、そうした抽象的な他者のまなざしを獲得して、具体的な他者のまなざしや自分の内側に向かうまなざしを相対的に軽くしようということなのですが。

N：まなざしを自分に向けないために目的を設定するというのはいいと思うのですが、スタートがおかしい気がします。自分の視点が強すぎる、つまり自意識が強すぎるまま目的を設定しても、相手と関わる振りをするだけになってしまい、相手は異物のままで、他者と自覚的に関わったことにはならないでしょう。

S：「相手と関わる振りをしているだけ」というのはきついですね。でもその通りなのでしょう。確かに、自分にしか関心がない状態、自意識が強すぎる状態は問題だと思います。そうした状態は、目的の設定で改善できると思うのですが、永延さんも目的の設定はいいと考えているんですよね？

H：いや、やっぱり目的をいいと思うところから見直さないといけませんでしょう。

増田さん（以下M）：でも、もちろん対話にも目的はありますよね？

H：話題や理解したいことがあるわけですから、そのつどの目的は確かにありますね。けれど、目的に依存してはいない。対話が有効になるためには、目的に依存してはいけませんでしょう。

S：目的に依存している関係が、関係のみに関心があり、まなざしが自分の内側に向けられている状態で、依存していない関係というのが、目的のほうに関心があり、まなざしがそちらを向いている状態、というように言えるとも思うのですが。

H：そういう区別ができなくなっているというのが、最近の問題である気がするのですが。やどかり祭のためとか、学園祭のためとか、今の若者も目的は設定するでしょう。でもそうした目的設定が何かおかしい具合になってる気がして、フレセミで話し合うのも妨害しているわけです。

S：確かに、やどかり祭や学園祭という目的が、関係を転がすための手段になっていては駄目でしょう。ですが、そうした目的が本当に欲求されているならいいと思います。関係を上手くこなすための目的と、自分の欲求としての目的という区別ですね。

H：そういう区別は、何があっても関係を切らない、相手を見捨てないということがあるのならできると思いますが。佐藤さん、今までの話についてどうですか。

佐藤さん：目的を共有することで相手の異質さに目を向けようという話を、想田さんはしていたと思うのですが、そうすることで、近くの他人に目を向けることになるのでしょうか。

H：それは別の視点からの批判ですね。目的を見つめているだけで、相手の異質さに目を向けることになるのか、ということです。

S：なると思います。例えば、学園祭の成功という目的を、佐藤さんと私で共有したとします。すると、成功させるためには何が必要か、何を重視すべきかということが問題であり、それは、佐藤さんがどういう人間で何を大事にしているか、という話になってくると思うんです。ですから、目的を見つめることは、相手の異質さを発見することにつながると思います。

佐藤さん：そう言われると、そうかなと思いました。

S：ただ、先生が目的でつながる関係を疑問視するのは、本当に欲求できる目的があったとして、それを共有する人とだけ関係するということがおかしいからですか？

H：どこに焦点を絞るべきか考える必要がありますね。対話においても、それを通して自己肯定が得られたり理解が深まって嬉しいとか思うわけだから、「自己肯定感を得るため」とか「嬉しいと思うため」という目的があるとも言えそうですし。問題設定が上手くでき

ないと、話が混乱しそうです。

S：では最後に確認だけ。前回のまとめは、永延さんの指摘に反対するような書き方をしていたと思うのですが、今までの話からその書き方は違ったかなと思ったのですが、どうでしょう。

N：まとめのどの部分ですか？

S：「個性を持つ」と「みんなと同じにすることを言う」を永延さんは分けて考えていると思ったので、「みんなと同じに」は、上から目線を嫌う、抜け駆け禁止の意味であり、同じにすることを要請は、個性を持つと主張する人の言葉だということなのです。

H：前回の想田さんのまとめと永延さんが言っていることに、考えの対立はないでしょうね。永延さんも両者を二項対立で捉えてはいないでしょう。むしろ、二項対立となるはずのところをごまかしている苦しい解釈だ、ということだと思います。つまり、対立を表面化させず（みんな同じに）かつ、個性を持とうとおもったら、自分の内側に個性を見出そうとするしかないわけですが、個性とは比較されてわかるものなので、原理的におかしいです。

S：そうした内閉的個性志向は息苦しいし、そもそも矛盾を含むものだ、というのは確認できたと思います。ですが、かけがえのなさということで交換不可能性を理解したとき、やはり、他の人と違う考えを持っているというような独自性や個性のようなものは、どうしても必要になってくると思うのですが。

H：確かに、かけがえのない存在を交換されない存在というような言い方をすることもできます。けれど、交換不可能性と個性は、概念として別物ですよ。発言する内容に差を出そうとしたところで、発言することによって確かめられた個性は、相対的なものに過ぎません。そうした内容による個性は神によって保障されるものであって、人間が内容の比較をする個性と一緒にすることはできませんし、すべきではありません。

M：内容の比較をする個性とかけがえのなさはつながらないということですか？

H：両者は無関係ですね。キルケゴールの研究をしていてデンマークに留学してる学生さんがいるんですが、彼はこのあたりのことを考えていたんでしょうかね。本当の意味で個性を追求するなら、宗教にいくしかないということですか。

S：まだ納得できていないのですが、人と違うことを考えることは価値ではないのですか？

M：例えばここに10人の人間がいるとして、その中の9人が同じ考えで、1人が違う考えだったとします。その1人を、すばらしいとか、かけがえのなさがあるとか感じたりはしないだろうということなのです。

H：これは直観的にわかる良い説明ですね。違う考えを持っているというだけで、すごいとは思わないでしょう。

S：確かに、そうやって示されると納得できそうな気もしますが、9人が同じ考えで、1人が違うというときの1人が自分だったらどうでしょう。私は、自分が他の人と違う考えを持っていたら、「自分すごい」とか「かけがえがない存在だ」と感じると思います。だか

ら、合意を目指す対話は、誰が言ってもいい意見を目指すわけですから、私を交換可能なものにしようとしている気がするわけです。

M：意見が他の人と違うというだけで、自分がすごいとは思わないと思うのですが。

H：増田さんも感じないですし、僕もそうは感じないということですね。ただ、対話ができない理由はわかりました。交換不可能性をそのように捉える以上、対話は原理的に不可能でしょうね。

M：あとは、100%のかけがえのなさを求めるなら、神に愛されるしかないのかな、ということも最近考えます。

H：愛については、一般に理解しやすい考えでしょうね。愛する人が他の人じゃ駄目というのは交換不可能性ですが、それは、その人の髪の色がどうか発言がどうかという内容の話をしているわけではありません。ただ、増田さんの言い方にも誤解があると思って、かけがえのなさや個性は別物です。かけがえのなさや愛は、神がいるということを持ち出さなくても言えるでしょう。カントは、かけがえのなさを上手く説明しています。けれど、個性については言っていません。

M：かけがえのなさや神によって保障される個性はつながりますよね？

H：そうですね。確かに、違いをすごいと思うというのも軽い意味でならあるでしょう。僕も、他の人と違う考えを持ったとき、そう思ったりもします。ただ、それは人と違う考えを持ったからではなく、その考えが対話に役立つからだとは思いますが。出生前診断に関する僕の文章は、まさにこのあたりのことを問題にしています。かけがえのなさは内容によって決まるのではない、ということですね。同じ内容でもかけがえのなさは認められます。というより、人間の理性には比較を絶した内容はとらえられない、ということでしょう。「個に価値がある」というのは、神の視点になります。人間の理性は抽象化してしまうけれど、神の知性は個を認識できる。人間は個を知性認識できないというのは、西洋哲学の基本的な用語の意味からもわかりますね。ただし、カントも言うように、かけがえのなさだけはあります。一般向けに言うのなら、人を愛したことがある人なら知っていると思うが、愛というものが存在するのかがまた問題ですが、愛することに理由はないだろう、ということですね。

S：わかることもあります。個性の話をするときには、それは比較することでしかわからないのだから、どうしても相対的な価値の話になってしまい、絶対的な価値、かけがえのなさにはつながらないだろう、ということですね。

H：人間にとっての個性はそのようなものでしかないということです。日曜にサンデルさんは「真っ先に手を挙げる人や手を挙げ続ける人には当てない」と言っていました。そういう人は大抵理解が浅いから。そうではなく、考えて、「これだ」と感じたような人に当てているみたいですね。

S：真っ先に手を挙げる人に当てないというのは上手いやり方でしょうね。「私に注目して！」という理由が大部分で手を挙げている人に当てて減らせる気がします。

H：サンデルさんも苦労しているみたいね。決して答えは言わないけれど、枠を作って外堀から攻めて、論を持っていこうとしている。このやり方だと割と上手くゆきますね。ランダムにあてて議論を深めるのは難しいです。ただ、昔はそれでも上手く行ってたんですけどね。何ででしょう。

S：それはもう、繰り返しになるようですが、私のようなメンタリティを持つ人が増えている、ということではないですか？授業で話題になっていることよりも、自分の居場所作りとか自分の個性の確認に関心がある状態です。

H：それは授業を履き違えていますよね。まあでも、ずいぶん参考になりました。概念化できていなかったことが明確になってきました。かけがえのなさや個性は分けて考えるべきですし、個性も区別する必要がありますね。

S：個性の区別は、『「個性」を煽られる子どもたち』（土井隆義、岩波ブックレット）でも行っていますよね？内閉的個性と社会的個性というように。

M：ここで先生が問題にしている個性の区別は、神によってしか保障されない個性と、人間が比較なしでは見出すことができない個性という区別ではないですか？

H：そうですね。昔は、カントがかけがえのない価値を人格に見出していくときの価値というのは、独自のものでないと駄目だと思っていて、想田さんもそういう呪縛があるようですが、でも、そうではなく、同じものでいいということなんでしょうね。人と違うことを言うから独自の価値があるというのは、相対的であり、原理的に絶対的なものには到れません。独自の価値、個性を見出そうと思ったら神に行くしかないわけで、その意味でキルケゴールはカントを超えたんでしょうか。カントは、美的から倫理的ということは言っているけど、そこではかけがえのなさを見出すにとどまる。キルケゴールは美的から倫理的、そして宗教に行き、個性をも見出したという意味ですね。

M：カントはかけがえのなさの先は何だと思っていたんでしょう。理性でしょうか？

H：その先は神秘である、という表現ですね。だから、『単なる理性の限界内の宗教』という言い方になり、個人として信仰を持つことはかまわないとしています。キルケゴールの考えと矛盾するものではないんですね。心ある人は、カントとキルケゴールをつなげて考えることが多いけれど、このあたりが理由なんでしょうか。「単独者」というのも、この文脈から理解できそうですね。一番最初に覚えた哲学のセリフは、キルケゴールのヘーゲル批判で「最高の真理は主観的」というものでした。当時は、押し付けられて真理とされるものというのに批判的だったので、自分だけが大事にできるものを真理としようと考えていたのですが、それではまだ浅かったようですね。「押し付けられる」ということについて、総合科目で面白いことを言っていた学生さんがいました。総合科目は比較的上手く行ったんですよ。ただ、授業の感想など送ってくれてもいいと話したんですが、まだ一通も来ていないですね。

M：それは来ないと思いますよ？

H：上手くいったと思うし、けっこう理解されたと思ったんですけどね。まあその学生さ

んが言うには、「最近自己犠牲を要求する圧力がある気がする」ということでした。大勢のために誰か1人が犠牲になることが、賞賛されるべきことのように扱われているというわけです。カントも、大勢のために1人が犠牲になるという事態に、おそくなるだろうということは認めているけれど、「そうすべきではなかった」という視点はなくすべきではないということを行っていますよね。これは、小さな違いのようで、重大な意味を持てきます。その学生さんには、「自己犠牲を本人の意志によってやりたいと思うならいいのではないか」ということを言いましたが、これは哲学的な問いですよね。本当に本人の意志だと言えるのかどうか。強制していないといっても倫理の教え込みがあるかもしれないです。ただカントは、それでもそういうものの強制でない意志があると言えるだろう、としているわけですが。

S：切捨での自己責任と大人になるための自己責任という区別にもつなげることができるかなと思ったのですが。切捨での自己責任は、自己犠牲の強要で、相手に押し付けるものですが、大人になるための自己責任というのは、「自分が自分であることを引き受ける」というように、自分に向かうものですね。

H：ですから、最近人は人に自己責任ということを使うのは控えています。それは自分がすることだろうと。ただ、時と場合にはよりますけれどね。

【まとめ】

前回のまとめ（永延さんの指摘に対する解釈）の訂正

永延さんの指摘は、「みんなと同じにすることと個性を主張することは、本来対立するはずなのに、同じ方向性のものとしてあつかい、ごまかしている」というものでした。今回はこの意図を理解できず、誤解していたので訂正します。

このごまかしの原因は、かけがえのなさという絶対的な価値と、社会的な相対的価値とを混同している点にある。かけがえのない価値として個性を考えているから、個性を主張する必要はある。しかし、社会的な相対的価値に振り回されてもいるので、「みんな同じに」という言葉で、対立を、つまり優劣を表面化させないようにしているのだ。対話による関係に安定感があるのは、他の人にも通じる普遍的なものを志向するため、具体的な他者の評価（相対的な価値）ではなく、合意によって支えられているからだろう。

個性とかけがえのなさ

対話においては、合意を目指し意見に普遍性を与えようとしているうちに、結果として、自身にも普遍性が与えられることになる。これは、自身が個別を超えた状態だ。したがって、対話でいうかけがえのなさとは、自他の区別がない（個別を超えている）ゆえに、そもそも交換が不可能であることだと思う。そこでは、交換という概念すらないのだ。

対話でいうかけがえのなさが、こうした「個別を超えているゆえの交換不可能性」だと

したら、個の内容によらずとも交換不可能であることを示す例として、愛の話は不適切ではないだろうか。というのも、「愛する人が他の人では駄目」というのは、どう考えても、その人は個として現れていると思うからだ。そして個として現れている以上、その人が他の人ではない理由、すなわちその人の個性（独自性）は必要である。ゆえに、「愛することに理由はない」は、「その人の髪の色や発言内容が愛する理由ではない」という意味でなら正しいが（個性は、髪の色や発言にも現れているが、それとイコールではないから）、「その人だから愛する」という形で、その人が他の人ではない根拠（個性）が愛する理由になっており、その限り、この言い方は正しくない。

このように考えてみると、交換不可能性とは、やはり、個性のことだと思うのだ。ただし、人間は、こうした交換不可能性（絶対的・かけがえのなさ）としての個性を見出すことはできないことも確認された。それでも個性を求めるのは、人間が有限な存在である以上普遍には到れないのに、普遍を目指す対話の姿勢と似ているかもしれない。

似ているかもしれないが、ここで増田さんの指摘に注意しなければいけない。「9人が同じ考えで1人が違う考えだったとき、その1人を、すばらしいと感じはしない」の意味するところは、「かけがえのない価値と社会的賞賛は別物だ」ということではないか。個性について考えるとき、絶対的価値と相対的価値を混同しやすい（だから「そのままの君でいい」という言葉も出てくる）。私は、他の人と違う考えを持ったとき、あたかも自分が特別でえらい存在であるかのように感じてしまうこともあるが、それは本来おかしい。他人と違うところを発見して嬉しくなるのは、自分が自分である根拠を見出せたからであって、その根拠自体に優れているも劣っているもないからだ。ゆえに訂正する。9人が同じ考えで、自分1人が違うというとき、「自分すごい」と思うのは、個性を相対的価値として考えてしまっているのだから、交換不可能性にはつながらない。そうではなく、自分1人が違うというとき、「やった！」とも思うので、そちらを強調したい。この「やった！」は、対話において、合意がなされたときに感じるであろうものに、近いのではないだろうか。

ここで、異質な他者との関わり方が問題になってくる。普遍性を求めて他者が必要なら、合意を目指す対話という関係を作ればよい。その場合のかけがえのなさとは、自他の区別がない（彼我を空ぜしめた）ゆえの交換不可能性である。個性を求める場合のかけがえのなさとは、他ではない私としての交換不可能性のことだ。ゆえに、個性を求めて他者が必要な場合、その関係は、もちろん合意を目指すこともできるが（合意された意見も「私」の意見であるから）、目的を共有することでつながる関係となるのだ。（このあたり10/19の演習とつながるか。対話は、「善くあろう」として普遍を欲求することをしないと、できないのではないかと、ということ）。